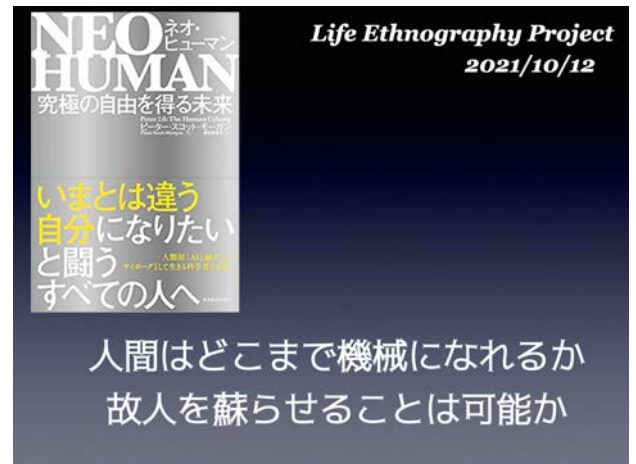


■ 主な活動

講義と読書会



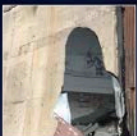
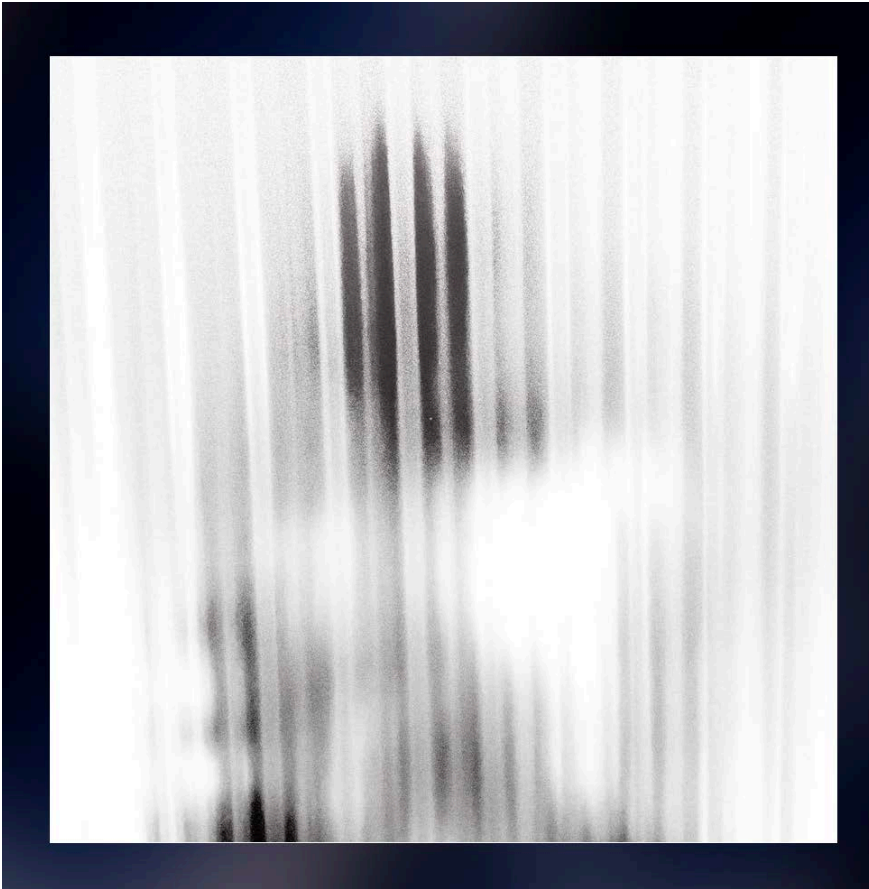
発表（IAMAS2022展）

全体テーマ：このたび、IAMAS(イアマス)は「IAMAS 2022」と題し、第20期生による修了研究発表会および2021年度のプロジェクト研究発表会を開催します。本展覧会とはコロナ禍と呼ばれる時代に悩み、議論し、作り上げた修士作品を社会に問う場であり、一つの大きな区切り——「あがり」の契機とも捉えられます。私たちが「あがる」ためには、この困難の時代を共にしたIAMASに関わるすべての人の協力が必要であり、本展覧会はその全員の参加を以って、「あがり」を祝す儀式としてあります。

プロジェクト・テーマ：「しなゆ」

<https://sites.google.com/iamas.ac.jp/lep-for-iamas2022/top?authuser=0>

しなゆ（萎ゆ）という現象を、腐敗、侵食、破壊といった「死の間近」という立場から視覚化してそこから得られるであろう「得体の知れないなにか」を抽出する。



た、すなわち、いち

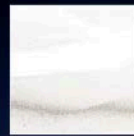
命 空き家 AR

「た、すなわち、いち」は生きている人に、どちらでもある曖昧な姿である、朽ちている空き家の写真をARフィルターで重ねた作品である。命は生と死、どちらでもある曖昧なものであるはずなのに、私たちはそのことを普段意識しない。朽ちているものの姿を重ねることで、どちらでもある姿を浮かび上がらせる。



修士1年
小林 玲衣奈

2021年3月 金城学院大学国際情報学部国際情報学科グローバルスタディーズコース卒業。景観や風景に興味があり、なぜ人は風景をテーマにするのかをリサーチ中。景観や風景への興味とあそびやワークショップへの興味を組み合わせられないかを考えている。



流転

砂 生命 インスタレーション

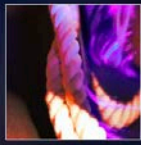
砂山には安息角というものがある。石英片岩である砂の山は、35度前後の角度以上には積み上がらない。そのため「35度前後」がこの砂山にとっての終わりである。しかし、砂山にとっての終わりは砂粒にとっての終わりではなく、流れ落ちた砂粒は次の砂山を生み出していく。途方もない時間をかけて運ばれ世界を巡り続ける砂粒は、流転する生命のように終わりを迎えることはないだろう。



修士1年
有賀 まなみ



散り散りの場所から流れ着いたマテリアルを拾い上げることで、異なる文脈を持つ物語同士が会うことによって生じる関係性を探究している。現在は流転する普遍的なマテリアルとして砂をテーマに作品制作を行なう。



手の中にあるもの

産屋 産綱 死生観 インスタレーション

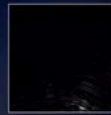
かつて存在した、人が生まれる場としての仮小屋と綱をモチーフにしたインスタレーション。お産の場を構成する小屋と綱という<メディア>の喪失から、失われた死生観を探求する。生まれ、死ぬことは、未だ私たちの手の中にあるだろうか？



修士1年
Mari KUDO



1982年生まれ、大学でフランス文学を学んだ後、システムディレクター・ウェブアナリストとして活動。出産・育児を経て、変容していく社会と技術を捉え直すためにIAMASに進学。



ふれる

touch vibration life water healing

3分間決して水を揺らさないように、手のひらで水面にそっと触れ続けること。触れる、振れる、ふれる、フレル。個人の歴史は結合組織に折り込まれてゆく。人間は結合組織という無数の弦でできた楽器 だと言える。固有振動を持ち、発信し続ける。何か、誰かに触れる時、意識することなく相手に伝わる身体のバイブレーション。その移ろい。月夜の晩に、とある現象を見つけた時にそんな想像をした。この現象を体験できるインスタレーション作品。

[過去の展示を見る](#)



修士1年
Kosei HAYASHI



ボディワーカーアーティスト
ボディワーカーとしてヒトのカラダにフレル中に見出される生じては消えていく様々な生命現象をアート作品へと展開する。



液体のような思い出、思い出のような液体（集団肖像画）

インスタレーション 顔 美術 写真

2022、手配写真の画像 / ボディソープにUVプリント / ボディソープにはんだごて / 水に浸した後の絵日記



修士1年
松本 悠



京都から遥々IAMASに漂着。ザッポー。醤油少なめの卵かけご飯が好き。カカオ多めのチョコは苦手。セブンイレブンのささみ揚げが気になっている。甘党。最近は、詩的言語や言語哲学のリサーチに基づいて制作を進めている。



箱の中に帰す

写真 身体 美術 インスタレーション

「シュレーディングアの猫」は生きてると同時に死んでいて、箱を開けて“観測”し、その生死が決定される。これは箱の中を観測する主体の存在が前提である。

死後は無に帰す。死後は人間の幻想でしかない。宗教や芸術は人間という非常に弱い生命のために存在する。人間は生死の循環の中で社会を構築し、生きる。

私は「死こそ永遠である」ことを知っている。自身の身体をなぞり、本作を制作した。本作は【遺影】だ。



修士1年
大越 円香



秋田公立美術大学卒業
主な展示に、アートアワードトーキョー丸の内2020(東京駅行幸ギャラリー)、SHIBUYA STYLE vol.14~15(西武渋谷)、個展「Unaccounted for *」(GalleryTURNAROUND/仙台)、個展「表層を観測する Observe the surface」(KUNST ARZT/京都)、IAG AWARDS 2019(東京芸術劇場)

岐阜おおがきビエンナーレ2021

<https://www.iamas.ac.jp/biennale21/>

タイトル：「L I F — E !?」

主旨：2004年から開催されてきた「岐阜おおがきビエンナーレ」。9回目となる今回は、アート、哲学、化学、生物学、宇宙生物学からのアプローチを集結し、「生命らしさ」に対するモダニズム/ポストモダニズム思考を超えることを目指します。

小林昌廣がファシリテーター及び講演を担当

講演タイトル：いのちの対話

講演梗概：生命とは何かという定義は生命とは何でないかという問いを同時に出来させることになる。そこで「生命と非生命」のあいだにあるものとして人造人間、ヒューマノイド、サイボーグ、ロボットなどいろいろに表現される存在について考えてみる。神が自らの姿に似せて人間をつくったように、人間もまた自らに似せて人造人間をつくりたかった。その欲望の最初はゴーレムという泥人形が最初かもしれない。ゴーレムは人間的な感情が湧いた瞬間に、少女の幼い悪戯によって土へと還ってしまう。同じように少女との幼い花遊びに興じていたフランケンシュタインのモンスターは、凶らずも少女を殺めてしまう。フランケンシュタイン博士の「生命の錬金術」によって蘇ったモンスターは雷光学の象徴がなせる技であった。一方、メトロポリスのマリアは、雇用者と労働者の階級闘争に破綻を生じさせるつもりだったが、人造人間だとバレて、火炙りにされてしまう。フランケンシュタインのモンスターも焼き殺されてしまうが、人間によって作られたものは、プロメテウスが人間に与えた火によって滅ぼされてしまうのだろうか。否、「R.U.R.」のロボットたちは、人間を滅ぼして自分たちだけになったときに種族が繁栄できずに危機に瀕していた。その時互いに愛し合う二体のロボットが登場して、ロボット界のアダムとイブとなった。しかし、ロボットやサイボーグには性差がないからこそ、サイボーグ・フェミニズム宣言がなされたりするのであり、また彼らに寿命を与えないことは「生政治」の課題を裏返しにしてしまう威力をもつことになる。いずれにせよ、生命とは何かを問うことは、現存在である人間を「死に向かう存在」と常に捉えることで、生と死の矛盾的同一の場面に人間を置くことに他ならないのである。

Gifu-ogaki Biennale2021
2021/12/18

いのちの対話

～生命の哲学史的定義をめぐって～

Dialogue of INOCHI

~for philosophical historical definition of Life~

情報科学芸術大学院大学 (IAMAS)

小林 昌廣 Kobayashi Masahiro

